

楠ヶ丘創設60周年記念事業
パネルディスカッション
「神戸外大、明日への飛躍のために」

平成24年10月28日（日）

神戸市外国語大学大ホール

基調講演「神戸外大にかける夢」

船山仲他学長

司会 最初のプログラムでございます。神戸市外国語大学の船山仲他学長に「神戸外大にかける夢」と題してお話を伺いたいと思います。船山学長、よろしく申し上げます。

船山 昨年の4月から神戸外大の学長を務めております船山でございます。きょうは、楠ヶ丘会、同窓会の方々のイベントということで、学長をゲストにお招きいただきましてありがとうございます。

私自身、大阪外国語大学の出身ですので、同窓生でないというちょっと肩身の狭い思いをしておりますけれども、きょうは15分ばかりの時間をいただいておりますので、短い時間ではありますが、その中で私が大きな将来像というものについてどう考えているかというお話をしたいと思います。2つお話しすることを考えておまして、1つは外国語大学の将来、もう1つが神戸と外国語大学のかかわり、そういう2つの視点から、これからの神戸外大を見ようかなと考えております。

まず、外国語大学の将来ということで、日本国内で大学の名前に「外国語」がついている大学は、今、7つあります。国立の東京外国語大学、公立の我々神戸市立外国語大学、あとは私学ということで、千葉の神田外語大学、あそこはちょっと名前が違っていますが外国語大学ということで、あとは名古屋、関西に来まして京都、関西、そして長崎ということで、7つの外国語大学があります。

やはり大学の名前の中に「外国語」が入っていることが1つの特徴だと思います。中身的には、総合大学の外国語学部。例えば大阪外国語大学が大阪大学外国語学部になったということもございます。中身的にはよく似ているところがあるのですが、とりあえず括りとして大学の名前に「外国語」が入っている、そういう7つの大学の将来を考えてみたいと思います。

そこでキーワードになるのが、語学力、コミュニケーション力です。ただ、今キーワードと申し上げましたが、いわゆる語学力って一体何なんだというのは、実はあまりはっきりしていない。でも、人は語学力という言い方をよくする。もう1つのコミュニケーション力、これも最近よく耳にする言葉ですけれども、一体コミュニケーション力って何なんだというのは、そんなにはっきりと定義されているものでもないし、人によってとらえ方が違う。語学力もそうですね。それぞれの人が、自分にとって語学力というのは何を意味するかという考えがある。コミュニケーション力も、自分にとってコミュニケーション力というのはこう

いうものだというイメージなり考えがあるということで、そんなに厳密なものではないですけども、一応、いわゆる語学力、いわゆるコミュニケーション力、そういった括り方をベースに、現状を考えてみます。

最近何かのアンケート調査で、企業が大学生に求めるもの、就職活動とかそういった中で何を学生に求めるかといった時に、コミュニケーション力が一番に来ている。それで、3つ目ぐらいに語学力が来ていたと思うんですね。とにかく語学力とコミュニケーション力とに分けて考えられている。

実はこの語学とか語学力というのは、歴史的に見ても、その理解は私が思うような理解ではないなというところがありまして、この神戸市外国語大学が外事専門学校から大学に昇格したのが1949年です。その前の1946年に神戸市外事専門学校ができていますが、当時、文部省に大学昇格の話を持っていった時に、文部省の人は、外国語とか語学とか、そういうもので大学にするのはふさわしくないといいますが、語学というのは学問じゃないということで、大学の名前に「外国語」が入ったようなものは認められないというのが最初の姿勢だったようですね。

私もこの外大の20年史とかそういう資料を見て勉強しているだけなので、自分がその時にいたわけじゃないですけども、東京外事専門学校、大阪外事専門学校、神戸外事専門学校、大体この3つが文部省と掛け合った中で、結構神戸の先輩たちが頑張ったようなのです。とにかく文部省を説得する。学問の府としての大学にふさわしいんだということで、詳しいことはわかりませんが、「単なる語学じゃなくて学問をやるんだ」みたいな議論をやって、それでようやく認可が下りたという記録が残っております。

そういうふうに、日本社会はちょっと変わったところがあって、外国語に関してとらえ方が、語学というと、単語をよく覚えている、文法規則をちゃんとわきまえている、そういう勉強をちゃんとしているかどうかという問題だというとらえ方が基本にあるんじゃないかなと。そういうふうに考えると、大学にふさわしい学問なのかというと、そうじゃないという文部省の考え方。

実はそういった考え方というのは、日本社会の中に非常に根深いといいますが、もう1つ例をあげると、TOEIC (Test of English for International Communication) というのがあります。今、非常にはやっていますけど、10年前ぐらいですか、そんなにたっていないと思うんですけども、企業の方はよくご存じだと思いますが、TOEICというのはばかにされていたんですね。つまり、企業の人から見ると、大卒の人が来て「TOEICの点数

は何点です」と言っ、そのTOEICの点数が高くたって仕事ができないじゃないかと。仕事の上で英語使えないじゃないかと。実際のコミュニケーションが必要だと。ビジネス・コミュニケーションに英語が役立てるかどうかが問題であって、TOEICのスコアがいいだけじゃ話にならないと、そういう声をよく耳にしたと思うんですね。

ところが、最近少し状況が変わってきまして、社内は英語だみたい。それで、社内で昇進の条件としてTOEICのスコアを要求するとか、そんなふうが変わってくると、一見とてもTOEICが尊重されている、非常に大事に扱われているような雰囲気になっていますけれども、最初に言いましたように、語学力とコミュニケーション力というのは別じゃないかという考え方は根深いと思うんですね。

そこで、この神戸市外国語大学は、外国語大学の1つとしてどういうふうなことをやってきたか。ほかの外国語大学もどういうことをやってきたか。日本社会の動きとしては、英語に限りませんけれども、外国語を使って十分コミュニケーションができる能力を持っている人間を大学に育ててほしいという気持ちが強い。これは変わらないと思うんですが、じゃあ語学力とコミュニケーション力は本当に違うものなのかということを考えてみると、実はそうじゃないと思うんですね。

そのことについて言う前に、もう1つ例を出すと、東京外国語大学がこの春から言語文化学部と国際社会学部という2学部制に移行したんですね。我々は、学部は外国語学部1つで単科大学ということなんですけれども、東京外大の亀山学長なんかは一生懸命おっしゃっているのは、外大へ来て学べるのは語学だけじゃないんだということを高校生、学生にわからせたいと。国際社会学部とかの学部をつくって何を望んでいるかということ、就職先に、外大の卒業生だったら語学はできるんだろうけどあとはクエスチョンみたいに思われるのは非常に残念だと。受験生にとっても、外国語が好きだったら外国語大学に行きましょう、自分はあまり外国語が好きじゃないからやめましょうというのは残念で仕方がないと。国際社会学部という学部にして、語学だけじゃないんですよとアピールしようということがメインじゃないかと思っています。

その外国語大学の中で神戸市外国語大学を考えると、もう25年前になりますが、国際関係学科というのをつくりました。今年東京外大が国際社会学部という学部の形で出してきましたが、内容的には実は神戸市外国語大学は早く25年前から国際関係学科をつくっている。この国際関係学科をつくる時もやっぱり文部省が難色を示したということで、外国語大学という枠の中で国際関係学がなんで入るんだみたいな状況だったようなんですけれども、いろ

いろ先輩がご苦労されて国際関係学科ができて今に至っているということでもあります。

大雑把に語学力とコミュニケーション力の2つに分けて、今の国際関係学科にしてもその枠組みの中でお話ししたんですけれども、私自身はどう思うかというと、語学力とコミュニケーション力を分けること自体がおかしい。コミュニケーション力のない語学力なんてあり得ない。語学力のない国際コミュニケーション力はある得ない。だから分けることが不自然だと私は思うんですね。一体となっている。

外国語大学についていろんなことがありますけれども、外国語大学という括り方の将来を考えてみた時に、いわゆる語学力といわゆるコミュニケーション力を合体できるかどうか、これに外国語大学の将来はかかっているのではないか。これをうまく合体できれば、少々時間はかかるかもしれませんが、世の中の人々が語学力、コミュニケーション力と言っていることの中身は何なんだという実態をよりよく理解してもらえらるだろうし、実際に社会が必要としている人間はどういう人間なのか、その両方が合体している人がほしいんだということを、外国語大学がそういう卒業生を出していくことによって世の中にわかっていただく。非常に大まかな言い方ですけども、そういうふうな方向に行くべきであろうし、自然とそうなると思うんですけどね。

さらに、外国語大学という枠組みと神戸の関係を考えてみますと、とにかく異人館のある神戸ですから、国際的雰囲気はそもそも神戸にあるわけで、実際に国際社会の中でやっていく人間を育てるということに関しては、神戸は非常にふさわしい場所であろうと思います。

この間、長崎外国語大学で学長会議があつて行ってきましたが、長崎の地も非常に外国との関係が深いところですね。日本の国として最初に交流が始まったところで、いろんな重要なことが長崎で起こった。ですから、外国語大学という名前のもものが長崎にあるのは、非常に適切で重要なことであると思いますが、長崎の地が今の東京あるいは関西に比べますと人口密度の低い地域になってしまっているんで、人が集まらないという非常に現実的なものがあつて、21世紀ではそういう難しさを抱えているなということを感じました。

神戸は、中心の1つと言えらると思いますし、日本と外国との関係という長い歴史もあるし、街の雰囲気もいいし、そういう相性はとてもいいと思います。この点、東京外大はちょっとかわいそうだなと思いますね。東京はすべてが集まっていますから、国際的ではありませんが、国際的であるのは1つの特徴であつて、ちょっと埋没している感じがします。

さっき言いました語学力とコミュニケーション力の合体ということですが、この神戸市外国語大学、神戸の地にあるということ自体非常にすばらしいことでもありますし、考えてみま

すと伝統がある。つまり、神戸市外国語大学を目指す受験生、高校生がコンスタントにある。皆さん方、卒業生の方の時代もそうだと思いますけれども、神戸市外国語大学に行きたいという若い人たちがある程度は確実にある。それは、神戸市外国語大学が六十数年存在していることによって徐々に培われてきたもので、なかなかすぐにはできあがるものではないです。現状、そういう固定ファンがいるという状態。それは非常に結構なことで、それを何とか維持しなければいけないのですが、さっき言いました話に結びつけますと、神戸外大に入ってくる学生は、やっぱり英語の試験でいい点数をとっている。それは現実であって、誇るべきことです。だから、スタートとしてはオッケーだと思うんですね

。あと、ここへ入学してもらって、さっき言ったコミュニケーション力をつけてもらう。

簡単に言ってしまうと、語学力は、たくさん単語を覚えて文法規則をちゃんと勉強しているということだけじゃない。そもそも外国語を使うということは、「話す」ということですね。「話せる英語」とか文部科学省もテーマを取っかえ引っかえするんですけど、高校生が英語の点数はいい、非常に知識は豊富だと。これはチャンスなんですね。知識は絶対必要です。しかし、それを実際に使うということはどういうことなのか。この世界の中で一人で生き延びていく、一人で行動できる。そのあたりをここ数年は「行動する国際人」という言い方をしているのですが、一人一人が世界の中で生きていけるということです。

そのためにはいろんな世界の地域に関する情報、知識を増やす必要がありますけれども、コミュニケーションの基本は、言葉を発する、言葉を聞く。日本社会は、西洋のものを翻訳して活用するということが非常に根づいているものですから、それは優秀だったんですが、どうも実際に「話す」ということが少し後回しになっている。本当はそれがまずあると考えたほうが良いと思うのですが、それよりも先にみたいなことになってしまったんです。

ですから、ここに入ってきた学生に対して、具体的には「話す」という行動を通して「聞く」という理解をし、自分のことを主張するというふうな、普通の言葉ができるようになってもらう。さっき言いましたように、語学力は何か狭いとらえ方が定着している感じなんですけれども、狭い意味の語学力をもちろん使いながら、普通の意味でのやりとり、外国語を使ったやりとりに慣れてもらって、それがどういうことかを学んでもらうと、日本の国にとって必要な人材を、この神戸市外国語大学から輩出することが可能になっていくであろうと。

この基調講演のタイトルは「神戸外大にかける夢」ということなんですけれども、非常に現実的な話で、日本に閉じこもる必要はない、世界の中で生きていける人間を育てていくと

いうことをやっていけば、そしてそれを積み上げていけば、外大の未来は、わざわざ「夢」と言わなくても、それなりのしっかりとした仕事ができ、社会に対する貢献ができる未来になるんじゃないかと考えております。

ちょっと時間が超過しましたが、いわゆる語学力、コミュニケーション力について、それを合体した人間をつくれれば、自然と将来の日本、そして世界に対して貢献する人材になるんじゃないかと考えておりますということを申し上げまして、私の基調講演にさせていただきます。ありがとうございました。（拍手）

パネルディスカッション

司会 お待たせいたしました。ただいまよりパネルディスカッションに移ります。「神戸外大 明日への飛躍のために」ということで、6人のパネラーの皆さんとコーディネーターとでお話をさせていただきます。

まずパネラーをご紹介します。国際関係学科4年生の向井裕貴さん、英米学科2年生の花房桂子さんです。

続いて、真ん中のお2人が、先生でございます。野村和宏教授、中嶋圭介専任講師です。

最後に、左端のお2人でございます。兵庫県観光監の藤井英映、パナソニック株式会社の上席理事でいらっしゃいます小西ゆかりさんでございます。

以上、パネラーは6名の皆さんです。

ディスカッションのまとめ役のコーディネーターは、楠ヶ丘会副会長の原和美さんでございます。

それでは、さっそくディスカッションを始めます。原さん、よろしくお願いいたします。

原 改めまして、皆様、きょうはお足元の悪い中、この会場に来てくださって本当にありがとうございます。同窓会の記念事業の1つとして、「神戸外大、明日への飛躍のために」というパネルディスカッションを計画させていただきました。先ほどご紹介いただきましたように、学生、先生方、同窓生と一堂に会してお互いに話し合いができることは、私の知っている限り初めてだと思いますので、私自身もとても楽しみにしています。きょうの進行を務めさせていただきますので、よろしくお願いいたしますと思います。

実はきょう、パネラーの皆様方にお話をさせていただくに当たりまして、何でもというよりも、いくつかテーマを絞ったほうがお話がしやすいのではないかとということもございまして、5つのテーマにつきましてご案内を差し上げました。1つは、「神戸外大にとって9月入学とは」。2つ目は、最近卒業生の半数以上を女子学生が占めておりますので、「多数勢力となった女子学生パワーをどう生かすのか」。3つ目が「行動する国際人養成のカリキュラムをブラッシュアップ（専攻語学に加えて、法経商と語・文学コースの選択）」というのがあります。4つ目が「卒業後の進路をより確かなものとするために」、5つ目が「飛躍のための大学と同窓会の協力関係の強化を」ということで、予めパネラーの皆様にご案内を差し上げています。これに沿った形でお話しいただくこともありますし、またご自身が日頃考えておられることについて、順番にパネラーの皆様にお話をさせていただこうと思っております。

まずトップバッターとして、兵庫県の観光監で観光行政のトップを担っておられます藤井英映さん、よろしくお願いします。

藤井 皆さん、こんにちは。今ご紹介いただきました兵庫県の観光監をしております藤井と申します。県では一応、今はやりの観光行政のトップをさせていただいております。

私、たぶんこの中で一番年長ということでトップバッターをさせていただきますが、2部の24回の英米卒でございます。昭和53年に卒業いたしました。もう30年以上がたちます。

いただきましたテーマの中で、全部話をするのかと思っていたのですが、どれでも取り上げてということでしたので、自分がなぜ県職員になったかというところをポイントにしたいと思いますが、特に難しい理由はなくて、皆さんもご存じのとおり、昭和53年というのは、第2次オイルショックで本当に就職がなかった時代でした。みんなが公務員に殺到するという時代でしたので、今の時代にちょっと似ているかなと思うんですけども、その時にたまたま兵庫県のほうに引っかかりまして、県職員をさせていただきました。

ただ、外大卒ということで、兵庫県の職員をして語学が何かに役立つのかなということは、ほとんど期待をしておりませんでした。ところが、急激な国際化が進みまして、ある日、人事課から呼び出されまして、「君は神戸外大卒やな。英語はできるか」と言われて、そりゃ外大卒なので「できません」とは言えませんが、「はい、一応」と答えました。そしたら、「シアトルに行かんか」と言われまして、本当に青天の霹靂でございましたが、県の事務所がその当時シアトルと香港にございまして、シアトル事務所に派遣していただきました。その時には、私、外大卒というのをすごく感謝いたしました。外大というバックボーンがあって、そういう抜擢をしていただきました。

また、シアトルに行きました時に、外大の卒業生が結構おられました。日通の支店とかJTBの旅行関係のところを外大の先輩がおられたんですね。海外のネットワークで外大卒というのがすごく役立ちました。ということで、私、外大にまず感謝を申し上げなければいけないなと今つくづく思っております。

それとあわせて、私たちが卒業する時も女性の学生が3分の2を占めておりました。今もその数字は変わらないのかなと思いますが、県の職員も最近、草食系男性職員が増えまして、女性職員のほうがすばらしい方が増えてきております。そういう意味で、女性を輩出している神戸外大というのは、これからすごく国際社会に役立っていくのではないかなと期待しております。

ということで、簡単に自己紹介とあわせてご紹介させていただきました。ありがとうございます

います。

原 ありがとうございます。

続きまして、同じく同窓生であります小西ゆかりさん、まだまだ女性が企業の中で活躍するのは数少ない時代に、今、パナソニックの中で上席理事ということで、大変ご活躍です。どうぞよろしくをお願いします。

小西 ただいまご紹介いただきました、パナソニックからまいりました小西と申します。私は、藤井さんより少し下になりますけれども、昭和57年、1982年に卒業し、パナソニックに入社をして今年でもう31年ということで、企業としてはパナソニックしか知らないですけれども、せっかく創立60周年の記念すべきパネリストに招かれたということで、いろいろお話しできたらいいなと思っています。

今、司会の原さんからもございましたが、男女雇用機会均等法が86年ということなので、私はその前です。ただ、当時パナソニックは松下電器だったんですけれども、女子も採用するという走りの走りだったんです。別に私が優秀だったからではなく、縁故採用を含めて、数年前から採り出した女子の先輩たちがすごく優秀で、採ろうということで引っかかったと理解しています。

先ほどは「一応」というお話がありましたが、私、なかなか語学ができなくて、「神戸外大出身やろ」「外大やろ」と言われて、そうなんです、平田ゼミを受けていまして、神戸市外・国語大学と呼べと言われている、日本語の教師の資格をとったぐらい、国語は大丈夫なんですけど英語はという形で、でも何とか生き延びております。

私としては、先ほど船山学長から非常に興味深い基調講演をいただいたのですが、コミュニケーション能力ってとても大事だと思っていて、語学力vsコミュニケーション能力の学術的論争には入れないですけれども、人の話をきちっと聞き、感情的にならず自分の思いをきちっとお伝えをし、理解いただいて行動に移してもらう。要はしゃべるときにしゃべるだけしゃべるというのではなくて、きちっと理解していただいて行動していただくというのは、企業のみならず組織、人とかわる中ではとても大事なことだと思っています。そういう基本的なところを神戸外大時代に学ばせていただいたかなと思っています。

女子頑張れということで、パナソニックも女性の活躍がどれぐらい皆さんからご評価いただいているのかわからないですけれども、きょうも女性が何人かいらっしゃいますが、あまり肩に力が入らず、壁にとらわれず、思ったことをごく緊張しながら普通に言うと、男性であれば「おまえ、黙っとけ」みたいなのが、女性だと聞いていただけるといような風

潮がまだまだ日本の中にあります。これから就職される方はいらっしゃるのでしょうか。女性の皆さんにはぜひ、日本にとって必要な人材を輩出する神戸外大出身者として、語学力とコミュニケーション能力を発揮して頑張してほしいなとエールを送っている1人でございます。

私自身の経歴は、当時、法規管理本部という法務部門に入りました。法学部出身でも何でもないんですが、外大出身ということで、国際契約は英語でできていますので、英語ができないと務められないということで、法経商を専攻して一応希望はかなったわけですけども、法経商を少しかじっただけの語学が不十分な中では全然通用しなくて非常に苦労した1人でございますので、その苦労話も含めてお話しできたらいいなと思っています。よろしくお願いします。

原 ありがとうございます。皆様に自己紹介を兼ねてご自身の持っておられる関心についてお話をさせていただいています。

次に、学生さんのほうに移っていきたいと思うんですが、向井裕貴さん、国際関係学科の4回生で、さっきお聞きしましたところ奈良県庁に就職が決まったということで、藤井さんの言葉をお借りすれば草食系男子になるんですかね。そうじゃないということも含めて、お話を聞かせていただきたいと思います。

向井 国際関係学科4回生の向井裕貴と申します。

先ほど奈良県庁で働くということでご紹介いただいたんですけど、きょうは進路のこととかをちょっと言いたいなと思っています。僕個人の考え方として、まわりと同じようなことをするのはあまり好きじゃないというか、まわりがやっているからというのは理由にならないと思っています。さっき「行動する国際人」というワードが出ていましたけれども、行動する前提として、自分の頭でしっかり考えて、将来何をしたいのか、自分の人生設計をどうするのかを考える人材がこれから必要じゃないかなと考えていて、そういう人材を出すために大学がどうすればいいのか、学生からしたらどうしてほしいのかということ、学生の身分ではあるんですけど、その学生の目線からお話しできたらいいなと思っています。よろしくお願いします。

原 続きまして英米学科2回生の花房桂子さん、よろしく申し上げます。

花房 こんにちは。英米学科2回の花房桂子と申します。私は、ここの学校に入学して2年目になるんですが、学生の視点から言わせていただくと、ざっくり言うといい学校だなと思っています。

高校、中学の友人とかに久しぶりに会ったときに、「どこの大学に行ってるの？」と言われて「外大」と言った時に、「じゃあ、英語しゃべれるんや」と言われて、今の外大と聞いた時の社会のイメージとしては、外大イコール英語がしゃべれるとか、ほかの何かしら言語がしゃべれるというだけのイメージがまだまだ強いなと感じるんですが、私自身は、外大に入学して言語ができる先輩方がもちろんいっぱいいるんですけど、それプラス、船山学長も言われていたコミュニケーション力、語学力を両方持ち合わせている方がすごく多いなと思って、これから社会にもっとそのイメージが出ていけば、外大の将来もよくなるのではないかなと思います。

きょうは学生の立場から、あまり大したことは言えないかもしれませんが、いろいろ考えていることを伝えていけたらなと思います。よろしくをお願いします。

原 ありがとうございます。先ほどの学長のお話の中にもありました、今の花房さんのお話もそうなんですが、語学学校は「しゃべれる」というのがすぐ来るんですけども、よく考えてみたら、外大って、例えば中国語学科とかロシア語学科とか「語」という言葉はついてないですね。中国学科、英米学科、ロシア学科、イスパニア学科。つまり、それは語学ということではなくて、その語学を通じて文化なりその国のさまざまなことを国際的に学んでいくということだと思っただけです。

この外大の誇るべき先生方から、次はお話をいただきたいと思います。まず、海外での研究生活がとても長くて、昨年帰ってこられたという中嶋圭介先生からよろしくお願いします。

中嶋 こんにちは。今ご紹介にあずかりました中嶋と申します。私は、もともと兵庫県豊岡市の出身で、こちらのキャンパスでは震災直後の95年に入学した組です。来た当時は、このホールの隣には学生用の仮設住宅が建ってありましたし、グラウンドには市民の方の住宅が建ってありまして、時々食堂では市民の方と一緒に並んでごはんを食べるといったようなキャンパス生活だった記憶があります。1年留学もありましたので、5年滞在してありました。

2000年に卒業したんですが、その後はずっとアメリカにおりまして、大学院で2年間、その後ワシントンへ移りまして、シンクタンクと申しますが、私は人口とか高齢化問題を専門にしておりますので、そちらの政策研究ということで、例えばメキシコとアメリカの間で長期的に考えて高齢化というのはどういう影響があるんだろうか、どういうふうなアメリカとメキシコは協力していこうかとか、そういう外交であったり国際舞台での人口問題で

研究をしたり提案をしたり、国際シンポジウムを開いたりといった活動をずっとやってまいりました。

こちらに赴任してちょうど1年半になるんですけれども、きょうのこのパネルに招いていただいて、私の一番の問題意識といいますか、スタート地点としてありますのは、後で野村先生に非常に良識あるコメントで締めただけということで私も安心していますので、若干パネルを盛り上げるという意味で過激なことを言うかもしれません。言えないところはこのホールを出たら忘れていただくという意味でお願いしたいのですが、このままで外大は大丈夫なのかなという危機意識があります。

もちろん私自身がこの大学で学んで、外でずっとキャリアを積んでくる中で、外大が提供しようとしているもの、目指しているところが間違っているということでは全くないですし、私もそれは正しいと思っていますけれども、ダーウィンが種の保存なんかで言うように、変化が激しい中で変わっていくものが生き残っていくということ、それは組織にも当てはまると思うんですね。環境、時代情勢の変化が激しい中で、変わり続けられない外大というのはいつかは絶えていくと思いますので、そういう意味では、方向性は正しくても、変化のスピードが遅ければ生き残れないと思います。

そういったことも含めて、ネタはたくさん用意してきましたので後ほどお話ししたいのですが、1つだけ、女性が多いということですので、私は外を見てきたということもあって、日本の中と外との大きな違いを1つ指摘しておく、ワシントンやニューヨーク、ロンドンなんかで国際的に活躍している日本人、特に20代、30代の若い世代では、圧倒的に女性が多いです。ちらほらと男性の方は見かけますけれども、大体そういう方は日本の組織の派遣駐在で来られている方であって、自分で大学院に出て、そこから地元で、プロパーといいますが、正規でたたき上げで国際機関や国際NGOなんかでキャリアをつくっていった若者は、圧倒的に女性が多いです。

私らも、ワシントンなんかでよく飲みながら冗談で話したんですけれども、女性は、留学なんかでアメリカに渡ってきた時に、ある種、背水の陣を敷く。ここで2年、3年勉強して、インターンもして、1年、2年経験を積んで、25~26になってしまう。そうすると、日本に帰ってキャリアを積むというオプションがほぼ絶たれてしまうということなので、西海岸から先の太平洋は日本にはつながっていない。あそこは水が落ちていて、もう戻る道はないんだという腹をくくった状態で現地で学ばれるし、腹をくくった状態でキャリアをつくっていかれる。それに比べると、男性は若干甘える部分があるのかもしれませんが。1年、2年勉

強した。ためになつたし、箔も付いた。帰ろうと。日本で何かやれることがあるんじゃないかと。実際に何かやれることもあつたりするわけです。そういうところがあるのかもしれませんが。

一方、日本の中で活躍の場を女性が求めていくということになると、皆さんもよくご存じの現状ですので、まだまだ優秀な女性たちは非常に難しい環境にあるわけです。その中でいかに自分を磨いておくのかということと、いかに自分がアピールできるのかということ。それから、この環境はちょっとと思つた時に移れるためには、日頃からいかに広いネットワークをつくっておくとか、それからきょうはあまり若い女性が多くないのでそういうことを言ってもいいと思うんですけども、どういう方と結婚するのかということも含めて、家庭の中でどういう役割ができて、自分たちの両親とどういう家族関係ができているからこそ子育てがどういう形で成り立つのかとか。

根本的に日本の中で行く場合には、大きく発想を変えて、どんなふうに家庭生活をつくるのか、子育ての環境をつくるのか、働き方を考えるのか、キャリアをどういう形でつくるのかというようなことを、かなり高い意識と向上心を持って生活が続けているような方でないと、おそらく女性で活躍することは難しいのではないかなと思います。そのあたりがどういふふうに大学とかかわってくるのか、同窓会とかかわってくるのかということも含めて、後ほどお話ししたいと思います。

原 ありがとうございます。きょうは参加者の方は少なくていらっしゃるんですが、今までの皆さんのお話で、ちょっと楽しいことが聞けそうだなと感じておられる方、多いんじゃないかと思います。

野村先生、外大で教鞭をとっておられるのがもう随分長くなりましたよね。でもないですか。最後に野村先生からお願いします。

野村 こんにちは。野村です。中嶋先生が「若い女性の方が多い」と言われましたが、多くないけど、若い女性の方、ちゃんとおられますので。この後、中嶋先生がどれぐらい過激に爆発されるかをちょっと楽しみにしているんですが、先ほどお話しされたように、「変わることはリスクだけれども、変わらないことはもっとリスクだ」という英語の言い方もありますよね。ですから、我々、どういうふうに将来に向けて橋を架けていくかということころは非常に大事だと思います。

私は1974年に入学をして78年に卒業していますので、藤井さんと同じ時に4年間過ごしたんですかね。今、外大はこういう立派な大学案内のパンフレットができていますけれども、

当時は、いまだに大事に持っているんですが、この薄っぺらいのが入学案内です。これに入学の手続から何から全部概要が書いてある。それから、これも大事に置いているんですけども、当時の講義題目。授業の説明も全部詰まっていた、時間割もついているということです。今は立派な本になって、その後、本もなくなって、ウェブ上で全部登録したりするようになっていきます。

78年に卒業してから同じく神戸外大の大学院に2年間行きまして、80年に卒業して、そのまますぐに短大で英語を教え始めました。12年間教えて、今度は私学の4年制の大学に12年間勤めて、2004年度から外大が大学院に現職の先生方のための英語教育学の大学院をつくるということで、その関係もありまして母校に戻ってくることになりました。ですから、昔からいるように見えるんですが、今年が9年目ということになります。

ただ、ちょうど国際関係学科からできた直後から10年間ほど、非常勤で外大に来ていました。できた当時の国関の学生というのは、自分たちは英米学科の学生とは違うんだ、国際関係を専門的に勉強するために来たんだ、英語は単にツールに過ぎないとかね、生意気なことを言うんですね。それで、ちょっとギャフンと言わせてやらないといけないとか思って、ものすごく難しい宿題を出したら、やってくるんですね。「テープレコーダーが壊れました」とか言いながらやってきたりして、なかなか骨のある学生が多いなと思った記憶があります。

いろいろと大学の将来のことを考える時に、私は、先ほどお話ししましたように、英語を学んで、ずっと英語教育の分野で来ていまして、仕事も大学以外ではしていないということです。そういう意味では中嶋先生のような国際的な観点、海外でどういうことが起こっているかということは身をもっては体験できていないということがあります。外大の人材育成、教員養成という分野、そして5本の柱にもあげていますが、高い外国語能力と幅広い国際的視野、文化、社会、政治経済に関する知識を備えた、行動できる国際人を養成するといった観点から、やはり教育的な分野で外大をさらによくしていく必要があるだろうなと。

中嶋先生は、このままいくと外大は危ないとか言っておられて、10年後にどうなっているかわからないなんて言われるんですけど、10年たつと幸い私は定年になっているんですが、中嶋先生はまだまだお若くて、10年後に大学がなくなると中嶋先生は困りますので、そういったあたりも踏まえて、何とかさらに飛躍できるようにという話がきょうはできたらいいのかなと期待しています。

原 ありがとうございます。それぞれ6人のパネラーの皆様これまで歩んでこられたご経験のお話もしていただきました。

今、さまざまな意見やお考えが出されました。それについて、パネラーの皆様自由に討論していただけたらなと思っております。中嶋先生から女性の活躍、今の日本社会が抱えている問題などありましたが、これも大きなテーマになってくるかと思えます。それも含めて、私たち同窓生もたぶん何かできることがあるだろうと思っているんですが、これからの外大像も含めまして、自由に議論をしていただければと思っております。パネラーの皆さん、どうでしょうか。

藤井 外大の進化という話がテーマになってきているのかなと思いますが、実は私、外大を卒業しましてから、県庁でシアトル事務所に行かせていただいて、国際部局に20年ぐらいいました。国際部局にいた時にふと困ったなと思ったのは、意外に歴史を知らない、文化を知らないところがありまして、言葉は何とかなってもバックボーンを知らないというところがありました。社会人で大学院にでも行って勉強し直そうかなと思ったんですが、その時、神戸外大のほうは語学系しかなくて、やむを得ず神戸大学でアメリカ文化論で修士をとらせていただきました。

その時に外大も学園都市に移って、学科が増えて進化し続けているなという印象は受けました。あわせて、そうなったら当然院もできますし、私の後輩も国際関係の院に行ってる方もおられますので、外大も進化し続けているなという印象は受けています。そのへん、中嶋先生のご意見はいかがかなと。

中嶋 昔も今も一定の優秀な学生たちを社会に輩出しているという意味では、その役割を果たしていると思いますし、新しい学科ができたりということも、変わり行く社会の要請に一部応えていることのあらわれであるだろうと思います。ただ、そのスピードがというところなわけですが、私がワシントンで勤めていた当時の研究所には、日本から二十数社ほどスポンサー企業さんがいらっしゃいましたので、今でも東京の本社に伺っては、そういったスポンサー先の経営者の方々とお話をする機会をずっと続けているんです。1年間に十数社ぐらいはお伺いして、国際もしくはグローバルの統括部署の方、もう少し上の役員の方とお話するんですが、グローバルな事業展開は避けて通れないと。その中で、意外に上層部ほど国内でたたき上げで来たというタイプが多くて、「現地に『おまえ、任せるからやってこい』というような形で自信を持って送れる人材が本当になくてね」と。いわゆるグローバル人材が本当にいないという話で、すごく悩みを聞くんです。

私自身、キャンパスの中の視点から見ても、こういうところにこそ外大は、本来人材をもう少し輩出して行って、活躍の場を与えてやらなきゃいけないと。本当にいい相性というのは見えているんですけども、一方、キャンパスの中で輩出していく学生たちを見ていると、その期待に本当に応えられるかという部分でちょっと不安があって、すごく優秀なんですけれども、優秀さがちょっと違うといたしますか。それは、先ほど学長がお話しされていた語学力とコミュニケーション能力のコミュニケーション能力の部分とかかわってくるんですが、細く小さくまとまってしまった教養人といたしますか。もう少し雑草のように生き残っていきたくましい教養人でないと、実際に国際的な場になると、非常に多様な人たち、スタート地点としてあらゆることを共有していない中から、自分たちがどこで合意できるのか、どういところが一緒に協力できるのかということを探り合って、見つけて、1つ1つの意思決定をしていく、1つ1つの仕事をなし遂げていくという作業をやっていかなきゃいけない時に、少しおとなし過ぎて弱いというふうな感じがあります。

それで、先ほどのコミュニケーション能力のところでは少し話を広げておきたいのですが、私、コミュニケーション能力の部分は2種類があると思っています。1つは、瞬間、瞬間といたしますか、シチュエーション、シチュエーションで必要になってくるコミュニケーション能力という意味で、例えば英語力を使って交渉をするとか、部署の中で議論をするとか、そういうふうな場面、場面で使っていくコミュニケーション能力。もう1つは、継続的なもので、言い換えればネットワーキングと言っていいのかもしれないですが、日頃からずっとお付き合いを続けながら培っていくもの。特に後者のほう、ネットワーキングの部分をうまくやり続けている方が少ないと思うんですね。

最近読んでいるものの中で、ネットワークに3つの整理の仕方があると学んだんです。1つは、同業者間で困った時にすぐに「これはどうだったっけ？」と聞けるような仲間が10人ぐらいいるのか。それから、もしかしたら自分の会社がつぶれるとわかった時に、すぐ次の仕事を探す時に何か頼れるという意味でも、同業者の仲間の人がいるのか。2つ目は、異業種の仲間がいるのか。いろいろ刺激を受け続けられるような仲間たちに囲まれているのかどうか。3つ目は、友達もしくは家族と良い関係が続けられているのかどうか。この3つのネットワークを継続してつくり続ける能力を、私はコミュニケーション能力と言っています。

学生たちにも、「非常にまじめで、できるのはいい。ただ、頑張り方を間違えちゃいけない。就職活動の時に、ほかの学生たちが20社エントリーを出すから、じゃ自分は40社エント

リーを出すと、そういう頑張り方じゃだめだ。ほかの人たちはエントリーシートをひたすら頑張っているけれども、自分は3社ぐらい企業訪問に行ってみよう。で、実際にその人たちと話をして、ああ、こんな仕事なんだ、こういうふうにキャリアをつくっていくんだ、現場はこうなっているんだという話を聞いてこい。そういう頑張り方をしなければいけない」とよく言っています。

野村 結局、こつこつとまじめに勉強して、優秀だけれどもたくましが足りない。簡単に言っちゃおうと。学生時代にいろいろ自分で機会を探して外に出ていっている学生もいると思うし、大学としてもそれなりのいろんな環境は提供しているとは思いますが、やっぱりまじめな学生が多いですね。外大に入るためにはそれなりに英語の力やほかの科目の力を持っていないと入れていないわけですから、まずは高校時代にきちんとこつこつ勉強して、その持っている力を基礎にして、それをどう大学で活用していくかというか、その部分で何かもう少しダイナミックな展開が必要なかなと思ったりするんですが、やはり国際関係学科ですね。

原 でも向井さんは、人に左右されないような主体性を持った人間になっていきたいとおっしゃっておられて、小さくまとまっていないですね。

向井 そうですね。自分もそうかと思うんですけど、人を説得するとか議論するという能力は、僕たちの世代はちょっと低いような気はしているんです。やっぱりそれは経験が足りないんじゃないかなと思います。大学のカリキュラムのことも一応テーマにあるんですけど、大学の授業でもレクチャー型の授業が多くて、学生が主体的に参加するような授業が少なく、学生同士で議論したり先生と議論したりする機会が、大学の中でも社会の中でもあまりないんじゃないかなとは思っています。

花房 私も、今いる外大生は、すごくみんなまじめだなというのは感じるんですけど、まだまだ自分の力を前面にアピールしてない人が多いなと思っています。

高校受験のときに英語を使って入ったというので、みんな英語はある程度はできると言われているんですけど、私が一番英語で大切だなと思っているのは、やっぱりスピーキング力だと思っています。外大生は、話そうと思えば話せるレベルだと思うのですが、それをまだまだ前に出していない人が多くて、

私は1回生のときに友人とC Iという団体をつくりました。キャンパス・イノベーションの略です。それはもっとスピーキング力をアピールする学生を外大の中で増やしたいなというのを目標にしています。今、活動しているものとしては、イングリッシュ・ランチという

ものをやっています。昼休みに友人同士とか紹介し合った人同士で集まって、英語で話そうという団体です。

この10月から始まったのですが、話すことが好きだという人は結構集まって、その場では盛り上がっているんですが、私の友人とかに、「イングリッシュ・ランチやってるんだけどどう？」と言ったら、「ちょっと恥ずかしい」と言われるんです。外大の中でその恥ずかしさを取り去っていったら、社会に出てから海外とかで活躍する機会、活躍する力がついていくんじゃないかなと思います。

原 今いろいろ話し合っ、さっきの向井さんの話では、多分ディベート力というんでしょうか。そういう力を学生時代にもっとつけておきたい。それには、今の花房さんの、何か恥ずかしいということにもまたつながってくるのかなと思います。

小西さん、社内で議論をされることが多いと思いますが、今のお2人のお話を聞いてどのように思われましたでしょうか。

小西 私自身英語ができないということもあるんですけど、今のお話を聞いて思うのは、大学時代にぜひ、まず日本語できちっと相手の意見を聞き、自分の意見を構築し、仮説と検証を立てながら議論を導くという、テクニックじゃなくコミュニケーション能力を勉強していく機会があり、それを外大ならではの語学力という形で実践するといったら、まさに行動するすばらしい人材になるんじゃないかなと思います。

英語で言うと、実は私、入社的时候はホームで、17年ほどホーム部門にいましたが、その後全然、目からうるこというか、青天の霹靂だったのですが、社会貢献の仕事を3年し、その後4年ほど社長直轄の全社のプロジェクトのリーダーをやり、今ブランド部門なんです。何が言いたいかという、語学ができる人ってたくさんいるんですよ。別にその人は外大出身でも何でもないんですけども、すごく語学ができて。

ですから、英語できるんじゃないの？と言われるとつらいんですけども、まさに言葉ってツールでして、仕事柄ネイティブの人としゃべるよりも、タイの人の英語とか、フィリピンの人の英語とか、何を言ってるかわからないんですけども、きちっとコミュニケーションとって、自分の意見をきちっと言う。多分日本人というか、我々に欠けているのはそこかなということで、この辺りをぜひ闘うというか、企業だけじゃないと思うのですが、特にパナソニックの場合、どの部署に入っても英語を求められますし、先ほど学長からもございましたが、カンゲツになるためにはTOEIC何点、国際部門に行くためにはTOEIC何点という足切りがあって、どれだけ能力、資質があっても試験すら受けられないという時代

がありました。

そんな中で、ツールとしての言葉も大事ですが、実践力をどうしていくかというのは大学でしか学べないんじゃないかなという気がしています。

野村 先ほど花房さんが、自分たちで英語でしゃべる。でもそれを恥ずかしいという、そこは乗り越えないといけないと思うんですね。自分も学生時代に、本当に燃えていて、話せるようになりたいと思って、これは授業でもかなりのところまで教えていただけるんですけども、そこから先へ行こうと思ったら自分でしないといけないなと思って、友達同士とかそういうグループに参加して、帰りの電車の中で、周りを気にせず日本人同士で英語でしゃべり続ける。周りから、この人たち変な人だなと。「おっ、見てる見てる。じろじろ見られてる」という快感を覚えている時期もあったり。つまり、ちょっと自分を追い込むというところもあったらいいのかな。

だから、お昼は英語でしゃべりましょうという場所を大学が用意して、ここはお昼は英語で話す場所ですよと言ってもやっぱりだめだと思うんです。つまり学んだことをもとにして、最終的には自立的な学習者になっていく。これは教育の基本だと思うのですが、いかに我々は学生に刺激を与えて、その気にさせて、上手に乗せて、あとは勝手にどんどん若い人は伸びていきますから、そこへ導くかということだと思います。

先ほど向井さんから、レクチャー型が多くて、ディスカッションとか、ディベートとか、そういうのは少ないというお話がありましたけれども、この辺りも数年前にサンデル先生の白熱授業、教室、ああいうのが日本でも広く紹介されて、教員側の意識も少しは変わってきているのではないかと思います。

高校の学習指導要領でも話題になりました2013年の今度の春から、英語の授業は英語でやれみたいなことを文科省がバーンと言って、それはとにかく先生が英語をしゃべり続けることが目的ではないんだけど、1つ新しいことをしようと思ったら、ちょっと過激なほうへ持って行って、揺り戻しがあってちょうどいい加減になるかなと思うのですけれども、高校の英語も教え方は必ず変わると思いますし、生徒、学習者の力を伸ばすための授業展開が大きな要素だと思います。学問的に専門家がそろっているのですが、授業力、教授力、指導力、そういった辺りでの議論は今後もっと必要なんだろうなと思います。

原 ありがとうございます。では10年後もこの外大にひょっとしたら先生としていらっしゃるかもわからない中嶋先生は、その改革の中身についてどんなふうにご考えておられるか、お願いします。

中嶋 いろいろな部分からアプローチできるかと思うのですが、カリキュラムの中身で言えば、内容的には外大は少し語文型のほうへ知識が寄っているような印象が私にはありますので、もうちょっと社会科学系とのバランスをとるべきだろうと思います。

別に語学文学の学者を養成するための学校ではないので、皆さん語学力を生かして社会に出て活躍するという話になったときに、あまりにもここの学生の方々は経済だとかそういう分野にうと過ぎて、日経新聞とか読んでも本当にちんぷんかんぷんのまま4年生を卒業していくのが多いので、その辺りは改善する必要があるかと思っています。

特に、グローバルなとか、国際的な最先端の動き、それから最も早い動きをつくっているのは経済とかビジネスの活動なので、そこの部分から目をそらしているような学生をどんどん輩出しているなんていうのは、ちょっと外大として矛盾していると思うんです。そのへんの内容のバランスをもう少しとるとというのが1つの部分です。

授業の中でのアプローチの話では、ディベートはどう成り立っていくのかなというのがあり、難しいなと思っている部分があるのですが、やれることで比較的效果があるのではないかなと思って、私自身も実践しているんです。グループで共同で執筆したり、共同でプレゼンをしたりという作業を私はものすごくたくさん取り入れるようにしています。

どういった人たちが自然とチームリーダーになっていくのか。お互いにどういう形でスケジュールやプレゼンの内容、執筆の内容を調整しているのか。そういった体験をもう少し繰り返すことが大学の中の、クラスの中のアプローチでもう少し取り入れる必要があるのではなからうかな。レポートとか試験に向かってレクチャーをやっているだけがあまりにも多過ぎるのかなと思います。

少しキャンパスの外へ話を広げますと、強く魅力ある大学であり続けるために、ほかの大学、海外の大学院なんかの方ともものすごくたくさん接する中で、1つ外大に足りなくて残念だなと思っているのは、強い同窓会のネットワークがないことです。

魅力のある、あそこの大学は常にいい人たちが出てくるな、社会に出てきても目立ってるなという大学は、大体同窓会もすごく活発で、ワシントンに私がいたときにも、海外の主要都市どこに行ってもですけども、自然と同じ大学卒業の方たちは集まってこられて、それは企業の役員クラスにおられる方から、今まさに卒業して留学でこの町に来ましたというような人たちも含めて交流する。本当に飲み会やってるだけの場なんですけども、そういうものが異業種間だったり、年齢を超えた縦の関係をつくっているんで、そういったものも少しこの学校にもつukれないのかなと。

キャンパスにもいろいろフィードバックしていただいて、刺激が欲しいですし、キャンパスから同窓会に対しても、こんな若い子たちをもっと輩出していきたいからどうしたらいい?とか、こういう子たちももうちょっと助けてほしいと、そういうふうなキャッチボールをもう少しやりたいと思っています。

原 ありがとうございます。実は私も同窓会のお手伝いをさせていただくようになってからしばらくたつんですけれども、同窓会というのは卒業してうんと社会的にも暇ができた、そういうときにはならないと意識が向けられないという風潮があるんじゃないかなとすごく思います。

最近、私たち女性のほうでウィメンズクラブというのをつくってございまして、外大の女性の同窓生の自主的な集まりですけれども、毎年講演会を開いてるんです。きょう来てくださっている小西ゆかりさんも実は講演をしていただきましたし、弁護士も卒業生の中にいらっしゃいまして、八隅さんという方はご自分で事務所を持っておられます。きょうも1時半からその方のお話を聞かせていただくのですが、大学と同窓生のフィードバックと申しますか、つながりみたいなものができたらと、私自身も思っております。

今、中嶋先生のほうからお話がありました、いつか先生に総会のおきにお聞きしたんですけど、卒業するときに、「自分はこういう仕事について」ということを残していられるんですけど。大学のほう。

中嶋 私自身が海外の大学院を出たときに、大学院の同窓会で実際に行われている制度ですが、メンター制度と申しまして、卒業生たちは自分がこういうふうな業界に入っていくことを記録として残していきますし、キャンパスに対しても、後々に続いていく学生たちが、もし自分の業界に関心があって、自分にコンタクトをとってきたいときには、こういうオプションであれば学生にコンタクト先を公開してよいという条件を残して卒業していくんですね。それから、ウェブサイトに行きますと、卒業生のページがありまして、そこで常に、自分が今どこで働いている、どういう部署である、どういう地域にいるのかというようなことを更新できるようになっているわけです。

それで、キャンパスの中の学生たちは、例えば東京で商社で働きたいということになったら、「東京・商社」という条件で探すと、ざあっと卒業生が出てくるわけです。その中から、メールでコンタクトできる方はこの方々、電話はこの方々、会いに来てもいいよという方々はこれだけおられるというような条件を見たところから、じゃあ今度1回東京に行って3人ぐらいお会いしてみようかなというふうなことを実際にやるわけです。私自身はアメリカに

いた当時に、大体キャンパスから年間6、7人くらいは必ず夏休みに来て、30分、1時間、時間を取って、中を見せていろいろ話をしたり、遠隔地からメールで、どういうふうなお仕事をされているのかとか、もう少し具体的な質問も受けていました。

原 今のようなお話がもう少し具体的に、大学なのか、同窓会なのか、そういうものが具体化できれば、卒業生の皆さんの同窓会に対する意識も高まってくるのではないかと思いますし、同窓生としても、そういう役に立ち方をしたいなど、私も個人的にとっても思っているわけです。

それでは、今のお話の中から、じゃあご自身はどんなふうに感じられたのか、どんなふうにされていきたいのか、またどんなふうと同窓会、大学は連携を保っていったらいいのかということについて、まとめというふうにはなかなかならないんですけど、最後にお一人ずつお話をさせていただこうかなと思います。

藤井さんからよろしくお願いします。

藤井 私も公務員をしておりますしてこんなことを言うのはなんでございますが、基本的には日本の社会ってぬるま湯ですよ。本当に何となくやっていける部分がすごく多いのかなと思います。でも海外へ出ると、自分で主張していかなければできないという壁にぶち当たって、国際的な活動というのはこういうものだなというのを外に出てやっと知ったわけです。

外大の学生さんは、どちらかというとな留学はよくされると思います。まず語学系がありますのでね。そういう意味で、外大の学生さんはどんどん海外へ輩出、留学をさせていっていただきたいなど。若いころの1年なんていうのは本当に大したことありませんので。私は実は、大きな声では言えませんが、高校で1年留年してますから、1年ぐらいどうっちゅうことないんで、中嶋先生も1年留学されておられますし、多分そのときのインパクトがすごく強かったのではないかなという気がします。そういう意味で、どんどんと外大生を留学させていただけるようなプログラムをつくっていただいて、もちろん卒業したら世界に羽ばたくぞというような学生をつくっていただきたいなと思います。

それと、同窓会のネットワークですが、海外へ出ると意外と外大生に会います。この辺が結べてないのが問題点なのかなという気がします。やはり神戸外大卒だということで、海外で助けてもらった方は本当に数えられないほどおられますので、その辺をいかにネットワークしていくかなというのが難しいのだろうと思います。

ただ、海外でやっておられる方は一線で頑張っておられて、なかなかお忙しい方が多いの

で、せいぜい年に何回か会って宴会をする程度の接触しかなかったのですが、仕事のつながりのあったときは、積極的に赴いていろいろと助けていただきました。その辺を拾い上げる工夫がまたこれから必要なのかなという気がします。

原 ありがとうございます。じゃあ最初の順番でいくことにしましょうか。

小西さん、お願いします。

小西 まとめというのはちょっと難しいんですが、お話を聞いていまして、非常に怖いけれども、野村先生や中嶋先生の授業を学生時代受けたかったな。でもやっぱり落ちこぼれるかなとかと思いながら聞いておりました。

教員を目指す方とか公務員を目指す方には違うカリキュラムがあるのかもしれませんがけれども、私のように企業で働くことを目指す学生にとっては、例えば海外の財務諸表を英語できちっと読んで、きちっと理解して、それがわからない人に説明できるみたいな、こんなクラスがあったりしたら、すごく自信にもつながっていいなと。英語を使って企業や組織や経済を語るみたいなクラスが、今もうあるんですかね。私も卒業して30年なのでよくわかりませんが、そういう手段系の語学としてのカリキュラムがあると、どんどん活躍できる神戸外大出身が増えるのかなというのが1つです。

もう一つは、同窓会の話が出ましたが、実は私も、配属された職場に2人外大の出身者がいたんですけれども、それ以外は全然存じ上げなくて、そんな中で、会社も大きいので、慶応の同窓会ネットワークとか、早稲田とか、なんだかんだをずっとうらやましく見てたんです。ちょうど4年前ですか、たまたま私と同期の人がブラジルに2度目の出向するというところで、一度パナソニックとしての神戸外大生を集めてみようという非常にありがたい人が出てきました。入社して初めて、サンヨー電機に行った人、電工に行った人、松下電器に入社した人、まとめて50名ぐらいの方々の名簿を見せていただいて、当日36名ですか、お会いすることができました。

たまたまそれは会社つながりなんですけど、六甲駅おりに公園のほうに行ったらうどん屋があるとか、銭湯があるとか、ここでよう食べたとか飲んだとかという、その人が六甲の駅まで行って、ちゃんとスライドにしてみんなに見せてくれて、それ見るだけで、初めてお会いしたのにみんなで肩寄せ合って抱き合うみたいな、何も言わなくても外大生みたいな気持ちがつながった瞬間だったんです。きっとそういう方々が全世界にいるのかなと思うと、ぜひそのネットワーキングの一人として入りたいなというお願いでございます。我々もできることは何でもいたしますので、どうぞよろしく申し上げます。本日はありがとうございました。

原 ありがとうございます。それでは向井さん、よろしくお願いします。

向井 授業のところで、ディベート力の話が出てたんですけれども、実際僕が1年生のときにディベートの授業がありまして、その授業はすごく盛り上がったんです。みんな積極的に英語で発言をして、授業時間外でも自主的に集まって、自分で調べものをして、そういうふうになんか盛り上がったので、外大生は野村先生も言われたように、モチベーションを与えれば自分で進んでいくことができると思います。

就職の支援でも、セミナーというかレクチャー型のものが多くて、1人の方が前に立って、履歴書はこういうふうを書くんですよとか、礼は45度ですよとか、そういう話をしていて。そういうのではなくて、アメリカのメンター制度のことや、きょうみたいにOB、OGの方から実際のお仕事の話の話を聞けたら、すごくモチベーションが上がると思うので、そういう方向で支援していただいたら、外大生は自分で進んでいけるんじゃないかなと思っています。

原 ありがとうございます。花房さん、お願いします。

花房 今回このような素晴らしい会に参加させていただけるという話をいただいたときに、私は今ラグロス部に入ってるんですけど、部活に入っている人たちだと、先輩との縦のつながりがあるので、就活どうですかとか、社会に出てからこの企業はこんな感じだよというお話はいろいろいただけるんですが、部活に入っていない人たちは縦のつながりが薄いので、そこをさっき言われていた学生と同窓会とのネットワークがもっと濃くなっていけば、海外で活躍する学生も増えていくんじゃないかなというのが1つあります。

野村先生や中嶋先生が言われたグループ型の授業とか、英語を土台としてプラスアルファの力、英語を使って何かができるという力を授業でつけていけるように、先生方もいろいろ学生のために考えてくださっているの、それを受け身になって、ただ授業を受けるんじゃなくて、先生方が努力してくださっているのを、学生も、自分たちからその力を身につけていくんだというのを主体的にいければいいなと。

あと、野村先生や中嶋先生などの素晴らしい先生方もいるんですが、先生全員が素晴らしい授業をしてくださっているとはちょっと言い切れなくて、(笑) すみません。例えば講読の授業なんですけど、英語の本を読んで訳して、その先生が解釈。ここはこうかなというので終わっちゃうという授業もあつたりするので、もっと外大全体が英語を土台とした、社会でも通用する力を身につけていけるような授業展開をできるようになればなと思います。すみません。まとまってなくて。きょうはありがとうございました。

原 ありがとうございます。なかなか、そうですね、いい意見も出ました。(笑)

じゃあ中嶋先生、お願いします。

中嶋 まず、キャンパスの中でカリキュラムの内容であったり、授業の中でのアプローチとか、そういうことに関しては、教員はこれが仕事ですので、愛する外大を守るためにも、それから自分の職を守るためにも、粛々と努力をしていくしかないと思っております。ただきょうは、外大の進化という言葉がたびたび出てきました。進化というのは内省的なものばかりというよりは、むしろ外からの要因に対してどういうふうな生き残るための解決策を見出していくのかという部分がキーになると思うのです。

つまり外大が社会とどういうふうな関係性を持って行って、そこに対してこの外大としての役割はどういうふうに意識して、そこに対して人材を輩出していくということを常に追いつけていかなければいけないということだと思います。

もう一つ、外とのつながりという意味では、輩出していった先輩の方々、OB、OGの方々、卒業生の方々とのつながりという意味で、同窓会とのつながりは重要になってくると思うのです。そういう形で、社会だったり同窓会とのかかわりが活発になってこない、恐らく中でいくら頑張っても、外大の進化は成し遂げられないと思います。

これから先を見据えてという話なので、少し具体的に私がやってみたいことというか、あったらいいなと思っていることがあって、それは同窓会の中の若手のプロフェッショナル・ネットワークの機能を強めたいというのがあるのです。現状としては、卒業するときには学生たちは、キャリアサポートセンター、昔でいう就職課ですね。そちらに名簿があって、卒業したらこういうところに就職します。連絡先はこうです。そういうものを残していくわけです。

大体そういうものが過去さかのぼって5年分ぐらい今でき上がってきているのではないかと思うのですが、1回卒業する瞬間にお願いして、つくったリストはそれこっきりです。で、4、5年たってくると、ほとんどの方は別部署に行かれていたり、別の会社に行かれていたりということで、そこで途絶えてしまうんです。

一応2年3年ぐらいさかのぼった先輩の方には、コンタクトはしやすい環境というのは中で一応つくっているということはあるのですが、私の授業の中でやっていることですが、国際ビジネスコミュニケーションというクラスがありまして、半期の授業ですが、その間に10社ぐらいの企業訪問をグループでしていただくというふうに課しています。向井さんもチームリーダーということで、チームを率いて企業訪問に行ってください。

どういったところに訪問するのかをきちんと考えて、チームで意思決定をして、自分たち

の力でアポをとってきなさいと。そのときに手段を選ぶなというわけです。手段を選ぶなというのはずるいことをしろということではなくて、そもそもあなたが仕事をこれからしていくキャリアをつくっていくという意味で、いろいろな社会人の人と話をしたことがあるのか。例えば、お父さんやお母さんがそもそもどういうきっかけで今の仕事についているのか。その後どういうことを思っているのか。自分がどういうふうにキャリアをつくったと振り返っておられるのか。そういう話をお父さんたちとしたことあるのかと。おじさん、おばさんとやったことがあるのか。お姉さんたちとやったことがあるのか。サークルや部活の先輩たちとしたことがあるのかと、そういうところからスタートして、自分たちの力でアポを取ってこいと言って外に出すわけです。

そのときに、今4、5年できているリストは非常に役に立って、大体年間10社訪問するうちの6、7社ぐらいは、このリストのおかげで卒業生の方々が応じてくださって、訪問が実現しています。私の理想で言えば、30代の中ごろとか、キャリアをつくり始めて、少なくともその業界、企業に十数年いるような方々にちょっと振り返っていただいて、自分がこの5年、10年、どういった形で外大を卒業したあと過ごしてきたのか。その中でこんなことが役に立ったよとか、あんなときにもう少しこういうことをやっておけばよかったとか、そういうことを伝えていただきたいと。もちろん50代、60代の方からは非常にありがたいお話は聞けるのかもしれないですけども、あまりにも変化が激し過ぎて、「30年ぐらい前に自分が卒業したときにはな」とかという話も、それはそれで興味深いのですが、もう少し今の卒業生たちが自分たちに課せる情報を得るためにはという意味では、もう少し若い方とのつながりが欲しいです。

ただ、現実的には、卒業するときに大学との関係は断ったような形になってしまって、卒業して2、3年たつと皆さん完全にコンタクトをとれなくなってしまうというのはあるわけで、同窓会に入る方もおられたり、入らない方もおられたり、それから、同窓会のイベントにもほとんど来られないということで、そうしたらどういうふうなインセンティブというかモチベーションがあればそういう人たちは集まってくるのかということ、自分たちの20代、30代の間でのプロフェッショナルなネットワーキングとして機能しているかどうかということころだと思うのです。

定期的に集まる機会があって、名刺交換したりしながら、自分たちの同年代で外大を出た人たちがこんなおもしろい仕事してると。なんか近くじゃないかとか、仕事かかわってるよとかってというような発見があって、そこから単に情報として刺激を受けたり、もしかしたら

実際に仕事関係が成立したり、そういうふうなメリットを20代、30代の人たちが同窓生たちとかかわり合うことで感じられる。そういう仕掛けづくりが重要だと思います。そういったことをキャンパス側からの支援隊として、それから同窓会の方々の助けも得て、何とか実現できないかなと思っています。ありがとうございました。

原 とても貴重なご提案をいただいたと思うんですね。でも同窓会側から言いますと、30代の半ばの人たちは連絡というのがなかなか、アプローチがしにくいんですよね。そんな世代って皆さん家庭的にも、仕事の間でも、一番忙しい時期で、余裕があるかなと思ったりもしますけれども、今のお話を聞かせていただく限りでは、やっぱり情報の共有化はとても大事なことで、それがネットワークを通じて。今の時代ですからね。そういう意味では、同窓会ももう少し機動的にならないといけないのかなという感じがしました。

最後に野村先生、お願いします。

野村 同窓会のこういう集まりということで、もう少し昔を懐かしんだ昔話の議論もできるのかなと最初思ったりしてたのですが、意外と将来に向けての大学のビジョンということに話がまとまって行って、大体学会に行っても、パネルディスカッションでパネラー同士がかみ合わないで、最後に質疑応答の時間も全くなくて、20分でしゃべってくださいと言っているのに30分ぐらいしゃべる人が普通ですから、消化不良で、何か不満足なまま終わる学会のパネルディスカッションが多いのですが、きょうはすごくかんでますね。

この後、会場の皆さんからいっぱい質問が出たらもっといいのになと思うわけですが、質問のためにちょっと切り上げ始めてるんでしょう。

楠ヶ丘会という同窓会の存在が、在学生の間にそれほど実感としては感じられてないんじゃないかなと。でも、クラブ活動の補助もしているし、UCLAを初めとする短期留学の補助もしていただいている。そして、4年生の卒業式のときに、卒業記念パーティを同窓会と振興会で開催している。だから、折に触れて名前を見てるんでしょうけれども、やっぱり在学中はどうしても楠ヶ丘会、同窓会という存在が薄いんですよね。ここのところはもう少し在学中から触れる機会があればと思います。

先ほど授業の話が出ましたが、やっぱり学生をどう動かすかということだと思います。動かすというのは、実際に立って歩けという体を動かすじゃなくて、頭を動かす。一方的に聞いて、作品を読んで訳す。これも非常に大事な部分であると思うのですが、自分でやっている範囲ではわからないことを先生がちゃんと解説をする。その解説を聞いて、あんなほんな、こういうふう考えるのか。

そこで、なるほどそうかという発見がどんどんあれば、そういう授業スタイルも1つは意味があることだと思いますが、確かによく学生から聞くのは、読んで訳しているだけだ。だけだというのはその先がない。そういうことですよね。

私も聞いて悲しいなと思う言葉は、外大に入るためには、英語科を持っていたり、国際科を持っていたりという、非常に英語教育に力を入れている高校から来ている生徒もいます。そうすると、SELHi (Super English Language High School) とか、高校時代にやっていた授業のほうがはるかに刺激があっっておもしろかった。これは聞きたくない言葉なんですね。

だからいかに教員が学生に知的刺激を与えて、考えさせて、また自分たちで動くことをさせていくかと。そのためには、一方的に資料を与えて説明をし続けるというのでは不足している部分があると思います。学生が自分で動き始めて、初めてそのところで何かが生まれると思います。

学生に何かさせるということは、先生が授業時間をサボっているということではなくて、確かに学生がいっぱいやってくると、授業中は楽なんですけどね。しゃべる時間が減りますので。私のスピーチの授業も、90分の授業のうち大体60分ぐらい学生が全部やっています。ただし、学生も役割を変えながら、司会進行を60分全部任される学生もいるし、即席でその場で発表する学生もいるし、用意してきたものをいかにしっかりと伝えるかということをする学生もいるし、その場で聞いたものをその場で論評する役割をする学生もいるし。そして学生たちは聞いたスピーチに対してお互いに投票します。自分たちで選びます。その結果をリーダーがまた表彰する。そういう一連の流れをやっていますので、訓練をしておけばどんな状況においても英語でそれなりに話ができる学生を育てたいと。

卒業生の中に、兵庫県の教員採用試験に行って、突然グループでディスカッションをしろと。あるいはしゃべれと言われた。これは先生のスピーチの授業でやっていたことそのままだったので、私は普通に頑張ってちゃんとできました。だけど、周りの学生はうろたえてましたみたいなことを言っている学生もいましたので、それなりに学生たちに身につけているのかなと思います。

私は今、基本的には教員養成とか英語教育の分野で、外大の中で自分の仕事をしているわけですが、同時に学生支援部長として、学生生活とか教職、入試、カリキュラム、情報関係、いろいろなところで事務局の皆さんとも仕事することがあって、本当に皆さん外大のために思って一生懸命やっておられると思います。

同窓会も含めて、現在の教職員、そして学生というのは宝の山だと思うのです。それぞれが自分のその場その場での使命をちゃんと自覚をして、うまくいかないのは環境のせいだとか、建物のせいだとか、社会のせいだとかと言うんじゃないで、うまくいかないときに、じゃあ自分はそこで何ができるのか。これはまさに昔ケネディ大統領が言った、「国が皆さんのために何かをしてくれるのを聞くのではなくて、自分が国のために何ができるかを問いたまえ」という、あの名演説に象徴されているのかなど。

だから、私自身は教員として、あるいは学生部長とか理事という立場で、自分がやらなければいけないことを考えていきたいなと思っています。

ケネディは別の名言も言ってますね。「屋根を修理するのは太陽が輝いているうちだ」。雨漏りし始めてからあわてて屋根を修理しても間に合わないということですよね。だから、手おくれにならないうちに何かしようよというのも、ケネディが言うと、さすがにかっこいいですね。こういう名言みたいなものも学生と共有しながら、何とかうまくいけばいいなと思っています。

同窓会の組織に関しては、先ほど中嶋先生がおっしゃったように、昔はゆったりと時間が流れていて、そんなにあくせくしなかったんですが、今は社会の変化が激しいので、そういう同窓会組織にもスピード感が求められるのかなど。そういうネットワークを、例えばウェブを使って立ち上げることは技術的には可能だと思うのです。あとはお金とか、やる気とか、そしていかに今から過去にさかのぼって、先輩たちの財産を取り込んでいくか。このところで、立ち上げはちょっとしんどい部分があるかと思いますが、これもやるんだと決めたら、やっぱりそこは決意を持って動いていかないといけないかなど。

公立大学としての説明責任もあるでしょうし、教育機関としての成果の可視化ということもあるでしょう。1期がちょうど今年度で終わって、来年度から2期ということで、外大も進化していかないといけないなということで。中嶋先生はもっと過激に、10年後はつぶれるぞと言われると思っていたのですが、意外と抑えられたのかなということで、私はこの辺りでまとめたいと思います。

原 どうもありがとうございました。野村先生は同窓会の常任理事もされておられて、同窓会の理事会でも、常任理事会にもいつもきちっと出席して下さって、貴重なご意見をいただいています。

それでは皆様に一方向的に聞いていただく時間ばかりだったんですけれども、あまり時間ありませんが、ぜひ皆さんのほうで、今のお話を聞いて何かご意見とか、ご要望とかありま

したらぜひ。どうですか、会場の皆さん。

塚野 どなたか質問でもご意見でも結構です。挙手で。いらっしゃいませんか。

(会場から意見あり)

塚野 ご意見として承るということですね。はい。ほかにご質問とか、パネラーの皆さんにお尋ねしたいというようなことがございますでしょうか。

なさそうですので、これをもちまして楠ヶ丘会創設60周年記念事業としてのパネルディスカッションを終わりたいと思います。

最後に、パネラー、コーディネーターの皆さんに改めて拍手をお送りしたいと思います。よろしくをお願いします。(拍手) 長時間ありがとうございました。

原 皆様本当にありがとうございました。なかなかまとめるというところまではいきませんが、きょうお話いただいた学生、同窓生、そして教職員の皆さんが一堂に会することができたという、この取り組みをスタートにして、私たち同窓会も今提案された中身について頑張っていくことができたらなというふうに思いました。きょうは本当に皆様ありがとうございました。

(拍 手)